

〔(公)病害虫防除試験（農林水産部食料安全室所管）〕

ムナグロデオキスイによるマンゴー被害の発生

近藤 健・馬場 隆・竹内浩二*

(小笠原亜熱帯農業センター・*生産環境科)

【要 約】2009年8月、小笠原亜熱帯農業センター試験圃場においてムナグロデオキスイによるマンゴー果実の被害を初めて確認した。収穫期の果実に1mm程度の孔を開けて果肉を食害する被害が見られたが被害果率は2%程度であり、被害程度は比較的軽微であった。

【目 的】

2009年8月、小笠原亜熱帯農業センターの鉄骨ハウス内（父島二子）で試験栽培中のマンゴーにおいて果実を食害する害虫が発生し、加害された果実からはケシキスイ類と思われる昆虫が採集された。これまでケシキスイ類によるマンゴーの加害は見られなかったことから発生状況や被害を明らかにし、今後のマンゴーの害虫対策の参考にする。

【方 法】

マンゴーを加害した昆虫を同定し、小笠原亜熱帯農業センター試験圃場での被害率を調査した。また、マンゴー生産者に果実に食入した害虫の有無について被害状況の聞き取りを行った。

【成果の概要】

- 1) 加害されたマンゴーは果皮には直径1mm程度の孔が開けられ、果実は孔を中心に直径5cmほど軟化、腐敗し、果肉は深さ5mm程度まで食害されており（図1, 2）、孔内からはケシキスイ類と思われる成虫が採集された（図3）。2008年に発生が見られたサクセスクイムシによる加害痕と類似していたが、サクセスクイムシによる食害よりも果肉内部の食害程度が大きく、食害された部分の果皮が円状に変色するなどの違いがあった。
- 2) マンゴー果実から採集したケシキスイ類はムナグロデオキスイ（*Corpophilus contegens* (WALKER)）であった。本種は小笠原、琉球、アジア南部に分布することが知られている（表1）。
- 3) 小笠原亜熱帯農業センターのマンゴー試験圃場での被害果率は2%程度であり、被害程度は軽微であった。また、父島・母島のマンゴー栽培農家に対して行った聞き取り調査では被害は確認できなかった。
- 4) まとめ：小笠原村父島でムナグロデオキスイによるマンゴー果実の被害を初めて確認した。ケシキスイ類はカンキツ類の訪花昆虫として知られているが、未熟果実に食入することは考えられず、今回はマンゴーを無袋で栽培していたため完熟状態または過熟になった果実の芳香に誘引され加害したと思われる。登録農薬は無いため対策として、①果実を適熟期に収穫する、②有袋栽培を行うことで果実を保護する、などが考えられる。



図1 ムナグロデオキシイによるマンゴー加害痕
(直径1mm程度の侵入孔, 直径5cmほどの腐敗)



図2 ムナグロデオキシイによる
マンゴー果肉の加害
(果肉内部, 果皮を剥いで加害部を露出)



図3 ムナグロデオキシイ成虫
(図中のバーは1mmを示す)

表1 ムナグロデオキシイの特徴

和名	学名	特徴	体長 (mm)	食性	分布域
ムナグロデオキシイ	<i>Corpophilus contegens</i> (WALKER)	前胸背板側縁は直線的, 背毛顕著で光沢が少ない	2.2-3.5	コブラなど	小笠原, 琉球, 南アジア

「原色日本甲虫図鑑(Ⅲ)」(保育社)の記載より